

勝川花菊の一生

長谷川時雨

青空文庫

勝川のお婆さんという名がアンポンタンに記憶された。顔の印象は浅黒く、長かった。それが木魚の顔のおじいさんのたった一人の妹だときいても、別段心もひかれなかった。ただ平べったいチンチクリンのおじいさんに、長茄子なすのような妹があるのかなと思つた位だった。

しかし彼女は小意気だった、その時分の扮装おつくりが黒つぽかったので、背のたかい細ほそおも面の女ひとを、感じから黒茄子にしてしまったが、五十を越しても水極みずぎわだつていた。

幾年かすぎて、ふとその女ひとがはじめて来た日の言葉を思いだした。

「お滝さんにも久しぶりで逢あえて——」

自分の姪めいの家へきて、にもなんて変なことをいう——子供の心は単純で、かげりをもつた言語ことばの深いあやを知らない。およそ、木魚のおじいさんの一族で、あんなに客として歓迎されたものはないのにと、無視された母のためにアンポンタンは軽い義憤をもつた。

だが、勝川のお婆さんの生立おいたちをきくと無理はなかった。彼女としては、女中同様に追廻して使つた姪に、さんの字をつけてよぶだけでさえ小癩こしやくにさわる——そうした気風の彼女だった。深川佐賀町の廻船問屋石川屋佐兵衛の妻女——なれのはてではあつたが、と

にかく代言人長谷川氏の家を訪れてきたのだ。彼女の手許の召使いだつた姪は、彼女の添そよにいたからこそ売出しのニュー新商売しょうばいの人の後妻にもなれたのだ、という誇りをもって――

勝川のおばさんという名と一所に出るのは佐兵衛さんと、も一人お角力すもうという人だつた。いま思えば三角関係だつたのもあろう。佐兵衛さんは旦那だんなで、勝川お蝶は権妻ごんさい上り、関取××は出入りの角力、そして佐兵衛さんはさしもの大資産おおしんだいを摺すつてしまつてもお蝶さんと離れず、角力は御鼻ごひいき負さきがペシャンコになつてしまつても捨てず、だんだん微禄びろくはしたが至極平和にくらした。

海上暴風雨けのためいつもは房州へはいるはずの、仙台米の積船ふねが、鰯いわしのとれるので名高い九十九里くじゅうくりの銚子ちようしの浜へはいつた。江戸仙台藩の蔵屋敷からは中沢某なにかしという侍が銚子へ出張した。

中沢という侍は、幕臣湯川金左衛門邦純とならない前の、木魚の顔のおじいさんの姓である。

浜方は船が一艘そうはい這入つても賑わう。まして仙台米をうんと積んだ金船が何艘となくはい

つてきたのだ。もともと蔵屋敷の侍ものといえ、武士であつて半町人なかばのような、金づかいのきれいな物ものごと毎ごとに行きわたつた世馴なれた人が選まれ、金座、銀座、お蔵前などの大町人や諸役人と同様その時分の社交人である。十人衆、五人衆、旦那衆と尊称され、髪かみの結むすひかたは本田ほんだまげ鬚ひげ細身の腰こしのもの刀かたなは渋しぶづくりといつたふうで、遊蕩ゆうとうを外交と心得こころえ違いちがひをしていた半官半商であつた。それらの侍たちや蔵前町人の豪華ごうしゃを幾度いくたびか知つてゐる浜はまのものは、鯨あがが上あつたように悦よろこんだ。

だが、ある夜よの中沢なかざわ氏の旅宿りやどには、湿ぬつぽい場面あんどんが行燈あんどんのかけに示しされた。それは木魚こぎよのおじいさんが幼少しゅせうのころ出奔しゅっぽんした、母親ははがたずねて来たのだった。成長せいじやうした子供の前まへへ、恥はぢもわすれて逢あいに来た母親ははは、十二、三の女の子おんなこを連れていた。

「それは不義ふぎの子である、拙者せつしやに縁ゆかりはない。」

大体たいたいの侍侍ならさういうであろうを、おろおろ泣ないてゐる母親ははと義妹ぎめいとを見ると、捨てられた当時たうじを思いだして、自分おれも泣ないた子供こども心こころにかえつて咎とがめなかつた。

江戸えど入りは三人さんにんになつたが、厳げんしい藩邸はんていの門かどはさすがにくぐらせられない。出入しゆりりの町ち家やに預まかけておくうちに母親ははは鳶頭かしらのところへ娘むすめを連れて再縁さいゆかりした。そこに年頃としがらのあんまり違ちがわない娘むすめがあつたので、連子つらこは妹いもうととよばれ、おなじように稽古けいこごとくも習まなわされるよう

になった。

この二人娘が姉は踊りで、妹は三味線で売り出して、諸大名のひいきも多くなった。両親は左団扇うちわのホクホクだったのである。その妹娘の勝川花菊が、アンポンタンが長茄子と見た勝川のお婆さんの前身だったのだ。

人気渡世の、盛りの花菊を、無理にも手生ていけにと所望し、金にあかして大家たいけの御内儀ごないぎとしたのが廻船問屋石川佐兵衛だった。

中沢氏が湯川氏となって、遠州お前崎から働きものの二女を連れてくると、一躍して位置のかわってしまった金持の御内儀花菊さんは、働きものらしい娘を、手許てもとで召使めいしってやろうと言出した。湯川老人もその店で仕事をもつようになったので、彼にいわせればなんとも致しかたがなかったのだ。私の母は彼女づきの小間使いに任命された。

大根おろしのように、身を粉にして動くことを、無益むだも利益もなく、めちやめちやに好んだ壮健至極な娘でさえ、ばかばかしいと思つたほど酷こき使こつた。行ゆきどころ 処ところのない身寄りだから逃げてゆかないという信状で、驕きょうまん 慢まんの頂上にいた花菊は無理我慢の出来るだけをした。無論他の者へも特別優しかったわけではない。

彼女が芝居見物の日は、前の晩から家中の奥のものは徹宵する。暁方に髪を結つてお風呂にはいる。髪結は前夜から泊りきりで、二人の女中が後から燈をもっている。他の女中は蒔絵の重箱へ詰めるあれこれの料理にてんてこ舞をするのだった。早くから船は来て（浅草猿若町にあつた三座の芝居へは多く屋根船か、駕籠でいったものである）、炬燵を入れ、縮緬の大座布団を、御隠居さんの分、隠居さんの分、御新造さんの分と三枚運ぶ。御隠居さんと御の字のつくのが石川氏の母親のことで、御の字のつかない方のが娘のために引きとられて楽隠居をしていた、湯川老人を捨てたお母さんであった。二人とも向う河岸の、中洲よりの浜町に隠居しているのを誘つて乗せてゆくのだった。この女たちも花菊夫人におとらぬ氣随な生活であつたであろうが、頭の方は坊主だつたから芝居行きに泣き喚きはないから無事だが、母屋の内儀の方はそうはゆかない。合せ鏡に気に入らない個所でも後の方に見出すと、すぐ破して結い直しである。それも髪結いさんが帰つたとなると、撫でつけがうまいので髪のことだけは氣にいつているお手許使いの姪のおたきがよばれるが、もともと機嫌を損じているのだから泣かされるまで幾度も結い直させられる。そうなると芝居なんぞは何時からでもよいとなる。お風呂ははいり直しである。昨夜から寝ないものもキョトンとしてそのまま手をつかねている。沖では船頭が寒がついて

る。二人の比丘尼隠居のところからはせつせと使いがくる。

夏の日は大川の船の中で昼寝をするのがならわしだった。髪を洗ってから、ちりめん浴衣で、棧橋につけさせてある屋根船へ乗る。横になりながら髪を煽がせるのだ。そうした大名にも出来ない気ままが、家のうちに充満して、彼女の笥には何百両の鼈甲が寝せられ、香料の麝香には金幾両が投じられるかわからなかった。現今の金に算して幾両の金数は安く見えはするが、百文あれば蕎麦が食えて洗湯にはいれて吉原へゆけたという。競べものでないほど今日より金の高かった時代である。

とうとう三菱が起り、三井が根をなし、旧時代の廻米問屋石川屋に瓦解の時が来た。残りの有金で昔のゆめを追っているうちに、時世はぐんぐんかわり、廻り燈籠のように世の中は走った。人間自然淘汰で佐兵衛さんも物故した。そのあとの挨拶に来たのが、私に印象させた長茄子のおばさんだったのだ。

ある時、急に社会が外面的に欧化心酔した。それは明治十八年頃のいわゆる鹿鳴館時代で、晩年にはあんなゴチゴチの国粹論者、山県元帥でさえ徹宵ダンスをしたり、鎗踊りをしたという、酒池肉林、狂舞の時期があつた。吉原大籠の遊女もボンネットをかぶり、十八世紀風のひだの多い洋服を着て椅子に凭りかかつて張店をしたのを、

見に連れてゆかれたのを、私はかすかに覚えている。わが日本橋区の間屋町は、旧慣きゅうかんぼ墨守くしゆ、因循いんじゆん姑息こそくの土地だけに二、三年後にジワジワと水の浸みるようにはいつて来た。でも私はびつくらした事がある。ある日、家へ帰つてくると、知らない顔のお母さんがいる。それが毎日の通り、ちつともちがわれないお母さんらしい事をしてくれるが顔がどうも違うのだった。なぜなら母の顔は眉毛まゆげがなくなつて薄青く光つていた。齒は綺麗に真黒だった。それなのに、目の前に見る母はボヤボヤと生え揃わない眉毛があつて、齒が白くて気味が悪かつた。彼女はまた何時になく機嫌よくニヤニヤするのでよけい気味が悪かつた。

と、祖母が言つた。

「おたき、眉毛が立つて狸たぬきのように見えてじじむさい、それだけは剃つたがよい。」

母は嬉しくなさそうな返事をしたが、私はやつぱりお母さんだったのだと思つた。急に黒襟えりのない着物を着たのと、髪かみの違つたのがなおさら人柄を違えて見せたのだつた。

私たちはその頃輸入されたばかりの糸で編んだ洋服を着せられ靴をはかせられた。二階にがいに絨じゆうたん緞たんが敷かれ洋館になった。お母さんが珍しく外出すると思つたら月琴げつきんを習いにゆくのだつた。譜本をだして父に説明していた、父は月琴をとつて器用に弾いた。子供

のおり富本とみもとを習った母よりも長唄ながうたをしこんでもらっている私たちの方がすぐに覚えて、九連環なぞという小曲は、譜で弾けた。チンチリチンテン、チリリンチンテンと響くこの真まん丸い楽器がひどく面白かったが、練習おそわりにゆくところが勝川のおばさんであろうとは随分長くしらなかつた。

私の家の外面的新時代風習はすぐ幕になってしまつて、前よりも一層反動化したが、世間では清楽しんがくの流行はたいした勢いだった、月明に月琴を鳴らして通る——後にはハウカイ屋というのも出来たが——真面目で、伊太利イタリーの月に流すヴィオリンか、あるいは当時ハイカラな夫人がマンドリンを抱えているような、異国情緒を味わおうとしたのだった。

私の家で、急激な母の変り方が、すぐまた前にもどつたのに面白い些細ささいな訳わけがあつた。それは私たちをとても可愛がつた酒屋が、利久そばやの前側にあつて、隣家とまりの家一軒買つて通りぬけの広い納屋にした空地があるので、いい私たちの遊び場だった。二月の末になると赤い布をかけた白酒たるの樽たるが並べてあるのをかき廻しても叱りもしなかつた。その酒屋の一人娘がワーワー泣いて阿父おやじさんに叱られていたが、小さなアンポンタンの胸は、父娘おやこのあらしいを聞いてドキンとした。

「そんな事をいつたつてお父さん、長谷川さんの御新造ごしんぞさんだつて、束髪こまに結つて、細こまつ

かい珠たまのついた網をかけている。あんなやかましいおばあさんがいたってさせるのに、家でさせてくれないなんて——嘘うそだというならいつてごらん本当ほんだから！ 買つとくれつたら買つとくれ、月琴も一緒に！」

酒屋の娘だからでもないだろうが、お榊ますさんというその独り娘は、島田をゴロゴロさせて泣き喚わめいた。

阿父おやじさんは、十とおにならない私には、新聞紙の一面を二つに折つたほどの大きさの顔に見えた四角い人だった。胸毛も生えて、眉毛がねじれ上つていた。節瘤ふしこぶだった両手両脚を出して、角力すもうの廻しのような、さしつこでこしらえた前掛をかけて、白い眼だった。私は日やまと本武尊たけるのみことの熊夷くまそを思うとき、その酒屋の阿父を思出してたほどだった。塩鮭しやけは骨だけ別に焼いてかじつた。干物は頭からみんな噛かじつてしまふし、いなごや蝸まいまい牛つぶらを食べるのを教えたのもこの人だ。それが怒鳴つた。

「おれの家うちでは買わせねえ、商業しょうべえが違ちがうのをしらねえか、どうしても頭に網をかぶせなきゃあ、そこにある餅網もちあみでもかぶれ。」

泣いていた娘と、青ぶくれな、お玉じゃくしのような顔の母親とは、キョトンとして、天井から釣るさがつている、かき餅のはいった餅網をながめたが、娘は一層狂暴に泣出し

た。母親は困って小さな私に救いを求める笑を送った。

私は駈けてかえって祖母さんに訴えた。祖母さんはだまって白い台紙に張りつけた、さんご珠まがいの細かい珠のついた網を求めさせてくれた。お榊さんは満足だったが、宅の母の方が、それきり束髪を止めさせられた。私の心の中で、母には似合わないと思つていたので、よしなので安心した。

勝川のお婆さんが日本橋区へ進出して来たのはそれから二、三年たつてからだつた。新道つづきの中一町をへだてた、私の通つた小学校のあつた町内の入口近かつた。一間半ばかりの出窓をもつた格子戸づくりの仕舞た家で、流行ものを教えるには都合のよい見附きだつた。夏は窓に簾をかけ、洋燈をつけ、若い男女が集まって月琴や八雲琴をならつていた。窓には人だかりがしていた。近くなつたので勝川お婆さんは涼みながら来ては、蛇三味線を入れるの、明笛も入れるのと話していた。彼女には、漸く昔の賑やかな生活の色彩に、調子はかわつていても、帰つてゆくのが嬉しかつたのであろう。

だが、そのうちに日清国交破裂となつた。清楽なんぞやる奴は国賊だとなつた。勝川の窓は宵から締めないと石が降り込んだ。で、いつの間にか窓が閉つて家の中の人も逐天

してしまった。

それから幾年、また勝川おぼさんの所在不明。

おおもときょう

大本教が盛りだした時以上に天理教流行の時があつた。一体下町で、いつも景氣の

よい宗旨は日蓮宗だが、時々新しい迷信が捲まき起おこることがある。ある時、葛籠屋つづらやの店蔵

に荒あら庭むしろを敷いた段をつくつて、段上に丸鏡さかきと燈明あかりをおき神繩しめを張り、白衣の男が

無中になつて怒鳴つていた。それを取りまいた一群が、トウカミエミカミ、トウカミエミ

カミというふうむに喚わめいていた、×××教ほりこしさんしょうというので堀越ほりこしさんしょう三升さんしょうでさえ——九代目団十

郎ごん——権少都ごんのしょうづの位になつて信心してゐるのだからたいしたものでさといふ勢いきほいだつた。

そのあとで狐狗狸こつくりさんが来た。これはむやみと景氣けいきがよくて大衆的たいしゆてきの大人氣おとないきで、いたるところ

向う鉢巻はちまき三味線さんまいせん入りで、車座くるまざになつて、お飯櫃はちのふたをかぶせた三本足の竹の棒たけのぼうに神の

来向ききやうを信じ、そら、足をあげた、ハイとおつしやつたとはしゃいだ。そのあとが天理教だ

つた。

天理教も大本教とおなじく、中山おみきさんという中国辺田舎のおぼあさんが教主で、

神田美土代町みとしろちやうに立派りつぱに殿堂てんどうをしゃにかまえてしまった。これは信者の婦人が樂器なりもの入り

で、白装束しろしやうぞく、緋ひの袴はかま、下げ髪さげかみで踊るのだった。なにしろ物見高い土地だから人ばかり

はすぐする。

勝川おぼさんが隠れてから十年もたったある日、大丸の向側の家で天理教の踊りがあつた。私の下の方の妹たちが通りかかりに覗いて見たら、広い店中祭壇にして、片側に樂人がならば、明笛みんてきだの、和琴わこんだの交つて、その中には湯川一族の、鉾山から逃出して歸つて来た連中たちの顔が見えた。もつとよく見ていると、緋の袴で踊る少女が、あの戸板といたみ店せのおせんべ屋夫婦の二女だったので、母に聞えては悪いもののように、歸つてきてからそつと私にだけきかせた。

「そうつといつて御覧なさい。今ならまだやつてる。」

だが、あたしには見にゆけなかつた。言わなくても母たちは、勝川へ藤木の二女むすめがずつといつていふという事はしつていたのであつた。

さすがの花菊も、もうたいへんすたれ果てた年となつていたのであろうが、お角力すもうは影の形かたち体を離れぬように、いつもびつたりと附いていた。御直参おじきさんならずものたちは口が悪いから、宅などへくると、

「お角力はやつぱりいるさ。」
といつて、

「あの角力も妙な男だよ。立派な^{ずうたい}図体をして、なんでまあああしているのかねえ。まるで権助同様なあつかいで、あのおばさんのことだから、ポンポン言ってるあね。」

「商業でもしてるのかね。」

「どうしまして、台所やせんたくがなかなか忙しいのに、あれで道具運びの荷ごしらえに手がかかりすぎ、力があるからお誂^{あつち}えむきだが。」

「あの男だつて相当な番附^{とこ}位置にまではゆけたらうにな。」

「色の白い、体の綺麗な角力取りだったが、何も石川屋が没落したからって、自分も角力を没落しなくつたつてよさそうもんだつたのに。」

だが、勝川お蝶さんの一生には、なくてならない人はこのお角力だつたのだ。傍^{はた}のものは道具はこびにお誂^{あつち}えむきだといつたが、お角力にはピツタリはまった役目があつたのだ。彼は勇敢に若き日の一生をかけて、その力を、自分の愛するもののためにとっておいたのだともいえる。そしてその最後の日が来た。

天理教の踊りがピツタリ逼^{ひつそく}塞してしまつたと、勝川おばさんの逼塞も本ものになつて、手も足も出なくなつてしまつた。むかし、大川の河風にふかれて船の上で昼寝をした夢をしのびながら、陋^{ろうきよ}居に、お角力の膝^{ひざ}を枕^{まくら}にして、やさしく撫^なでられながら彼女の生涯は

終った。

あたしの母も、母の姉のお房さんも行った。夜更けて帰って来て、なにしろ家がせまいから、明朝あしたまた早くゆくといつてくつろいでいた。その翌日いたらもう死者は家にいなかった。落つくはく魄御直参連一党がづらなつて帰つて来てつぶやいた。

「今度こそ角力が入用な人間だったつてことがわかったよ、おぼさんの役にたった一番目で、それがおしまいだ。」

「だが秀逸だ、あの男の。」

父が出てゆくとみんな頭を揃えてさげて、

「ありがとうございます。取りかたづけはすみました、角力がひとりで、しよつてしまいました。」

「そうか、あの男でも、それだけの準備はしてあったと見えるね。」

「ところが、それがね、しよつてしまつたつて、一さいの事ではないのですよ。滑稽こっけいなことにはおぼさんの棺桶かのおけをしよつてしまつたんでさあね。」

「人夫にしよわせるのは嫌だともいうんでしようね、お角力さんの心意気だあね。」
と母が言った。皆は笑つた。

「とにかく、今夜はおれひとりでお通夜をします。長く世話になったからというから、家はせまいし、^{もつとも}尤だと思つてまかせたら、^{やつこ}奴さんその間に、すたこら、自分で始末して、棺に入れてしよつて、^{やきば}火葬揚へもつてつてしまつたんで——おばさん死ぬまで、重宝な権助をつかまえといたもんだ。」

だが、私の目には笑えない、生涯のそりとした、そのくせ誠実な大男が、愛した女の^な亡骸^{きがら}を入れた桶をしよつて、^{しり}尻はしよりで、暗い門から露路裏を出てゆく後姿をかなしく思いうかべられた。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

2004年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

勝川花菊の一生

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>